岡下誠
表紙イラスト：ズンダレぽん
看護婦姉妹
二人がかりの
どきどき看護
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『看護婦姉妹　二人がかりのどきどき看護』
に基づいて作成しております。

※本作はリアルドリーム文庫『看護婦姉妹と令嬢実習生　魅惑の入院体験』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

看護婦姉妹
二人がかりのどきどき看護
岡下誠
表紙／ズンダレぽん
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

いたばし あきら
板橋 彰

20 歳の大学生。都内のマンションで一人暮らし。細身の中性的な容姿で、優しい性格。

しろ は ね ゆ り
白羽根百合

大学付属の総合病院に勤める 28 歳の中堅看護婦で、彰の従姉。

しろ は ね らん
白羽根蘭

百合の妹。姉と同じ大学病院に勤める看護婦で 25 歳。

初めての入院体験から一週間後……。
板橋彰(いたばしあきら)は元の大学生活に戻っていた。
講義に出る。
ノートを取る。
眠気と戦う。
テニスサークル。
コンパ。
どこにでもいる平凡な大学生として、外では全く目立たない彰。
しかし自宅マンションの中では、誰もが羨むような日常を過ごしていた。
「彰くん。起きなさい。大学に遅れるわよ」
ひと声かけただけで寝室に入ってきたのは、なぜか白衣を身につけた美熟女。
「ゆ、百合(ゆり)姉さん……」
白羽根(しろはね)百合。
近所の大学病院に勤める看護婦で、彰の従姉である。
彰が憧れ続けてきた女性であり、彰を『男』にしたのも彼女だ。
眼鏡をかけた知的風貌をしている百合だが、その肢体は女としての官能美に満ちていた。
純白の白衣は、肉感美あふれる身体を詰め込まれて今にもはち切れそうである。

患者たちからの信頼も抜群。
彰は心ひそかに『白衣の女神』と呼んでいる。
あの入院以来、百合は彰のマンションに押しかけてきたのだ。
表向きは「職場に近いから」という理由で。
しかし本音は……。
それを思っただけで、彰の股間はびくびくと脈動する。
寝起きの生理現象に加えて、牡の興奮で男性器はぎちぎちに強ばりきっていた。
「あの……百合姉さん？　どうして白衣を着ているんですか？」
「昨日の夜、彰くんが着てって言ったからでしょ」
「それは……確かにそうお願いしましたけれど……」
昨晩、百合に白衣を着るように頼んだのは他ならぬ彰だ。
わざわざ着てもらった白衣の裾をまくり上げ、四つん這いの百合を犯したのも彰である。
美熟女看護婦をよがり啼かせたのも彰。
絶頂とともに半ば失神させたのも彰だ。
「さあ、彰くん。朝の検診をするわよ」
タオルケットにくるまったままの彰を、百合は蠱惑的な眼差しで見下ろしていた。
「え……？　検診って……？」

戸惑う彰をよそに、百合の手がタオルケットの中にもぐり込んできた。
「こういうことよ……」
短パンの上から男性器をつかまれる。
「はうっ……」
年上女性の手で男の象徴をつかまれ、彰は歓喜の呻きをもらした。
美人看護婦につかまれたことを喜んで、勃起男根は力強くのたうっている。
「男性のここは、健康を見るためのよい指標になっているのよ」
短パン越しに肉柱をしごき上げられた。
布地を突き上げている強ばりに指が絡みついてきて、淫らにこすりしごかれる。
「あっ、あうっ、ううっ……」
巧みな指づかいで男性器を愛撫され、彰は喜びの呻きをもらした。
「ふふふ……。健康状態は良好ね。とっても元気だわ」
眼鏡の奥にある瞳は、蠱惑的な光を宿している。
「私をあれだけ責めたのに、もうこんなに回復しているのね」
百合の手つきは、健康状態を診ているといった類のものではない。
男性器を愛撫しているかのような指づかいだ。
「んうぅ……んっ……んんぅぅ……」

あおむけに横たわったまま彰は歓喜に呻く。
短パンの中では、男性器がびくびくと脈打っていた。
亀頭の割れ口からは、牡欲の先汁がもれている。
「百合姉さん……。お願いだから……」
彰は、左右の手でシーツを握りしめながら身悶えしていた。
勃起男根には欲望が溜まってゆく一方で、居ても立ってもいられない。
「お願いだから……出させて……」
眼鏡をかけた年上女性は、その瞳を嗜虐にぬめらせている。
彰をじらすことに喜びを見出しているのだ。
「何を言っているの。これは朝の検診なのよ。我慢しなさい」
「そ、そんな……」
百合の手は、淫らな蠢(うごめ)きで男性器を喜ばせてくれる。
しかし、喜びが爆発しそうになる寸前で、手は動きを弱めた。
男性器の脈動が落ち着くや否や、百合の手は再び蠢き始める。
「こ、これ以上じらされたら……僕……」
射精一歩手前でのお預けを繰り返され、彰は理性を失いかけていた。
じれったく淫らな『検診』をこらえかねて、彰は自らの手を股間へやってしまう。

年上女性の前で自慰姿をさらすことになろうとも、欲求不満を解消したかったのだ。
しかし……。
「だめよ、彰くん」
やんわりとした口調でたしなめられた。
素早く手首をつかまれ、股間から引きはがされる。
「朝からオナニーしちゃうなんて、恥ずかしくないの？」
からかうような口調で言いつつ、眼鏡の看護婦はベッドの上に上がってきた。
あおむけになった彰の顔面をまたぎ、そこへしゃがみ込む。
立て膝姿勢になった百合は、彰の上腕部をすねで押さえつけた。
「こうすれば、恥ずかしいことができないでしょ」
確かに、彰の腕を封じるとともに、百合自身の手は自由になっている。
このまま状態を前に傾ければ、空いた両手で彰の股間を責めることができる。
患者の男性器を『検診』するには絶好の姿勢だ。
しかし、患者の顔面をまたいでの立て膝は、この上ない恥辱を看護婦に味わわせている。
スカートの中が丸見えになっているからだ。
しかも……。
（百合姉さん……やっぱり、下着を穿いていないんだ……）

白衣の中に見える股間は、下穿きを着けていなかった。
そればかりではなく、股間の底に息づく女唇には、一切の陰毛がない。
幼女のような無毛でいながら、大人の妖艶な女陰花が咲いているのだ。
「私のあそこ、どうかしら？　こうすれば少しは気がまぎれるでしょ」
百合は、患者の上腕を脚で押さえつけたまま、挑発的に尻をくねり舞わせる。
「気がまぎれるっていうか……余計に興奮しちゃうっていうか……」
妖美に咲き乱れる女陰花を見せつけられては、かえって牡欲が高ぶってしまう。
ただでさえ強ばりきっていた男性器は、先汁をもらしながら脈打っていた。
「彰くんのおちんぽ、しっかりと検診してあげるわね」
タオルケットをまくられ、短パンをずり下ろされる。
「あうっ……」
強ばりきった肉柱があらわになった。
「何度見ても、魅入られてしまうわ……」
年上の美人看護婦は熱い溜め息をもらす。
「私……このおちんぽで気をやらされちゃったのね……」
愛情と畏敬が入り混じった口調でささやいてから、百合はゆっくりと身を屈めた。
亀頭の縫い目に、うやうやしく口づけする。

「あぁぁ……。百合姉さん……」
憧れの年上女性に口づけされ、男性器は喜びに脈打っていた。
「こうやってお口で味わうと、より一層のこと健康状態が分かるの」
亀頭の縫い目を唇でついばまれ、舌先でつつかれる。まがまがしく肥大した亀頭を舐めまわされ、唇で吸いしごかれる。
そのたびに、あおむけで押さえつけられた身体が歓喜に引きつった。
「どう？　私の検診、気持ちいいかしら？」
「は、はい……。とってもいいです……」
口唇を駆使しての検診は気持ちいいのだが、やはり最後の一線は越えさせてくれない。
彰の男性器は、狂ったように跳ね暴れている。溜まる一方の牡欲を発散させて欲しいとばかりに、亀頭の割れ口から汁をもらしていた。
「お、お願いだから百合姉さん……入れさせてください……」
たまりかねた彰は、ぶざまな仕草と自覚しつつも、剥き出しの股間をはね上げる。
「我慢しなさい。まだ検診の途中なんだから」
「そんなこと言っても……百合姉さんだってあそこが……」
四つん這いになった美人看護婦は、患者を誘惑するかのように尻肉をくねらせていた。
無毛の股間に咲く女陰花は、発情の蜜汁でぬらぬらと光っている。

尻肉をくねらせるたびに、彰の顔面へ蜜汁が滴り落ちてきた。
唇をつかっての男性器検診に、百合も牝情をかき立てられているのだ。
「そ、そうね……。男性の健康状態は、あそこで測るのが最も正確だから……」
熱い吐息とともに百合は亀頭へむしゃぶりついている。
白衣スカートの中では、包皮が剥け返るほどに女芯が勃起していた。
濡れそぼった女肉穴は、男性器をねだるかのようにきゅうきゅうと収縮している。
検診という名のもとに彰の男性器をじらしているうちに、百合自身の方が牝欲をこらえきれなくなってしまったらしい。
「いいわ。私のあそこで……検診してあげる……」
知的美貌の看護婦は、彰と対面する姿勢で彼の腰をまたいだ。
眼鏡の奥の瞳を牝情に潤ませつつ、ゆっくりとしゃがみ込む。
肉感的な美尻を下ろし、濡れ潤んだ女陰花を亀頭にあてがう。
(あぁ……。百合姉さんのあそこ……)
溜まりに溜まったものをいよいよ吐き出せるのだ。強ばりきった男性器は、期待に身をわななかせている。
濡れ乱れた女肉穴が亀頭をくわえ込もうとしたその瞬間……。
寝室のドアが勢いよく開けられる。

「何やっているのよっ」
怒気のこもった声とともに、別の女性が乱入してきた。
「彰も姉さんも、こんな朝から恥ずかしくないのっ？」
百合の妹・白羽根蘭。
姉と同じ大学病院に看護婦として勤めている。
（うわっ……。蘭さんのこと、忘れてた……）
潔癖症の傾向がある蘭に、こんな『検診』風景を見られてしまったのだ。
心の中で冷や汗をかく彰。
しかし、股間にそびえる男性器は、一向に収まる様子がないのであった。

「彰も姉さんも、こんな朝から恥ずかしくないのっ？」
百合の妹である蘭は、冷ややかな眼差しで姉と彰とを睨みつけていた。
蘭の前髪は、きっちりと真横に切りそろえられている。
百合の目がやや垂れがちでやさしい印象であるのに対し、蘭の瞳は切れ長。ややもすると冷たい印象を受ける。
「いったい何よ、この有様は？」
「あら。朝の『検診』をしていたのよ」

牝欲のわだかまりにさいなまれて、尻肉がくねっている。素っ裸で這いつくばる美人看護婦が、肉感的な美尻を揺すっているのだ。

「ちんぽの洗浄看護は、あそこでのしごき洗いで仕上げるの……」

蘭は、無毛の女唇があらわになるのもかまわずに、彰の腰へまたがった。濡れほころんだ女陰門を肉胴へあてがい、淫奔な腰づかいでこすり上げる。

清らかな美貌の看護婦は、自身の女陰を捧げて男性器をこすり洗いしているのだ。

「んあぁ……あっ……あんっ……」

高い嬌声（きょうせい）が浴室に響く。

たくましくそそり立つ男性器に女陰の秘粘膜をこすられ、蘭は女の喜びに悶えている。

男性器を洗っているというよりも、男性器をつかって自慰にふけっているかのようだ。

「あぁぁ……ひっ……んはぁ……。彰のおちんぽ……すごい……」

泡まみれの豊乳を彰の胸板へこすりつけるようにしながら、女唇の割れ目で肉柱をずり上げていた。男の象徴をこすっているうちに、女花弁は恥ずかしげもなくめくれ返ってしまう。彰のもので初めての喜びを知らしめられた女肉穴は、しとどに蜜をもらしていた。

「ら、蘭さん……。僕……もう我慢できません……」

美人看護婦の女陰でしごき洗いをされ、彰の男性器は歓喜に脈打っている。

「し、仕方がないわね……」

こっちシーン試し読み スタート!

そうは言いながらも、蘭の瞳は牝情に潤んでいた。半開きになった唇からは熱い喘ぎがもれている。

「男性患者の欲望を慰めるのも……看護婦の務めだから……」

物欲しそうに収縮している女肉穴へ亀頭をあてがい、少しずつ尻肉を下ろしてゆく。

ぬぶ……ずぬぬぬぬ……ずちゅ……。

濡れそぼった女肉穴は亀頭をくわえ込み、ゆっくりと飲み込んでいった。

「ひっ……あぁぁ……んあぁぁ……」

たくましい肉柱を根本までくわえ込んだ瞬間、蘭は歓喜に身をのけ反らせる。

脱力して彰の胸板にもたれかかり、熱い息づかいで喘いでいた。

「あぁぁ……。子どものくせに……おちんぽだけはすごいんだから……」

蘭は、いまだに彰を子どもあつかいしたがる。

しかし、子どもあつかいしている彰の男性器をくわえ込んで、息も絶え絶えになっているのだ。

「あぁぁ……だめ……腰が……持ち上がらないの……」

美脚をわななかせて尻肉を浮かせようとする蘭だが、下半身から力が抜けきっているようだ。股間の中心部を男の象徴で貫かれ、歓喜の脱力に見舞われている。

「腰に……力が入らなくて……んっ……んうぅぅ……」

太いもので押し広げられた女肉穴は、きゅんきゅんという収縮で男性器をむしゃぶり吸っていた。ふしだらな喰い締めで快楽を貪るとともに、はしたなく蜜汁をもらしている。

ナースキャップしか着けていない美人看護婦は、彰の上体にもたれかかったまま女の喜びに悶えていた。

「あそこが……気持ちよすぎて……ああん……」

女陰を捧げての洗浄奉仕をしているはずの蘭。

だが、男性器という肉杭で磔(はりつけ)にされて、すっかり打ちのめされていた。

「蘭さんが動いてくれないなら、僕が……」

彰は美人看護婦の腰に手をまわし、荒々しく男性器を突き上げ始める。

裾野を広げた亀頭で、濡れそぼった女肉穴をえぐり上げた。

「ひいっ、ひっ、あん……」

清らかな美貌の看護婦は、はばかりないよがり啼きを浴室に響かせる。

肉杭の突き上げに合わせて高い声を放ち、泡まみれの女体をくねらせていた。

「だ、だめ……。腰……つかわないで……あひ……あぁぁ……ああん……」

子どもあつかいをしている彰に犯され、蘭はいいようによがらされている。男の象徴で責められ、官能を奏でさせられていた。

「だって……蘭さんのあそこが吸いついてくるから……」

理由になっていないような言い訳を口にしつつ、彰は獣の激しさで腰をつかう。快楽にのたうつ男性器で、美人看護婦の女体を突き上げた。

「あひっ……ひあっ……あぁぁ……。もう……もう許して……」

冷ややかな美貌をしている蘭だが、彰の男性器に責められて陶酔しきっている。女の喜びに乱れ、今にも昇りつめようとしていた。

「じゃないと……わたし……ひっ、ひぃ……あん……」

うっとりとした顔で悶えている蘭を前にして、彰はさらなる牡欲に駆られていた。

何かにつけてお姉さんぶる美人看護婦を、もっとよがり乱れさせたくなってしまうのだ。

「僕が腰を止めないとどうなるんですか？」

子どもあつかいしたことへのお返しとでもいうように、彰は容赦ない腰づかいで女体を突き上げている。

しとどに濡れ潤んだ女肉穴をえぐり抜き、お姉さんぶっている蘭に女の喜びを味わわせてやる。

「いくっ……いっちゃうの……」

ナースキャップに飾られた黒髪を振り乱しながら、蘭は官能に悶え啼いていた。絶え間なく与えられる快楽を何とかして処理しようとするのだが、処理速度を上まわる勢いで後から後から官能が押し寄せてくる。

「私が飲ませてあげる」
百合は、錠剤とコップを手に取ってから、ベッドの上に上がる。
白衣のスカートから伸びた美脚を大きく広げ、あおむけになった彰の腰をまたいだ。
スカートはひとりでにずり上がり、太腿の付け根とそのさらに奥が垣間見える。
百合は、白のストッキングをガーターベルトで吊っていた。股間に穿いているのはピンクのビキニショーツ。
大きく股を広げた百合は、勃起男根の上に腰を下ろした。ショーツに包まれた股間へ、強ばりきった肉柱がめり込む。
（百合姉さんのあそこ……）
憧れの年上女性である百合。
その最も秘めやかなところと、下着一枚を隔てただけで触れあっているのだ。薄布を通して女陰門のやわらかさを感じ、男性器は力強く跳ねのたうつ。
「薬を飲みたがらない男性患者には、こうやって飲ませるのよ……」
唇に錠剤をくわえ、身を屈めた。あおむけの彰へ、口移しで錠剤を与える。
「んうぅぅ……」
彰は喜びに呻いた。
唇へ押しあてられた錠剤を、舌で押し込まれる。

（一部抜粋）
ここから読み
スタート！

「お水、飲ませてあげるわね」
百合は自らの唇に水を含み、やはり口移しで彰に与えた。
「んっ……んうぅ……」
年上女性の舌を伝って水が流れ込んでくる。
「はふっ……んぅ……んっ……んんっ……」
水にぬらめいた舌が、彰の唇へもぐり込んできた。執拗な抜き差しでかき分けられる。
(な、何だか……水を飲ませてもらっているっていうよりも……)
舌で唇を犯されているかのようだ。
彰が風邪薬を飲み込んでも、百合は舌の抜き差しをやめようとはしない。鼻を鳴らしながら、さらに粘ついた舌づかいで唇を貪り犯した。
ちゅぷ……ちゅぷ……ぢゅぷぷ……。
(んっ……んぅ……百合姉さんの舌……気持ちいい……)
知的看護婦のぬめった舌を繰り返しえぐり込まれ、彰の牡欲は熱くたぎる。
百合の股間に押しつぶされている男性器は、先汁を滴らせながら力強く脈動していた。
下着の向こう側にある女陰門へ、欲望のたぎりを伝えようとしているかのようだ。
「お薬、飲んだ……?」
白衣をまとった眼鏡看護婦は、舌と唇とを駆使した彰の唇を吸いむしゃぶっていた。

「は、はい……。飲みました……」
彰は、欲望のわだかまりを懸命になってこらえている。
男性患者にとってこの上なく嬉しい方法で薬を飲ませてもらい、股間のものが痛いほどに勃起してしまったのだ。
「では、おとなしく寝ていなさい。そうすれば風邪はすぐに治るから」
そう言って百合は上体を起こす。
「え……。そ、そんなこと言われても……」
強ばりきっている男性器を鎮めなければ、寝ようにも寝られそうにない。
それを分からない百合ではないはずなのだが……。
「なあに？　まだ何かして欲しいことでもあるの？」
眼鏡の奥にある瞳は蠱惑的な光をたたえていた。どうやら百合は、欲望に悶えている彰をからかって楽しんでいるようだ。
「あ、あの……このままじゃ眠れないっていうか……その……」
あおむけに横たわった彰は、百合にのしかかられたまま腰をもじもじとさせた。股布に浮き出た盛り上がりに、男性器をすりつけているのだ。
牡欲に悶えている男性患者を、百合は嗜虐の眼差しで見下ろしている。
「ところで彰くん。昨日の夜、何をしていたの？」

「え……？」
彰は口ごもる。
「風邪を引くようなことをしていたんじゃないの？」
「それは……その……」
風呂場で蘭としていたことを百合に知られれば、どんなお仕置きをされるか分かったものではない。
「風邪の原因を調べることも、看護の一環なのよ」
もっともらしい口調で言う百合。
しかし、眼鏡の向こう側にある瞳は看護婦らしからぬ潤みを帯びていた。
年下の男性患者を馬乗り姿勢で組み敷いているという状況が、百合の嗜虐心を目覚めさせてしまったらしい。
「素直に答えてくれたら、気持ちよく眠らせてあげるわよ」
眼鏡をかけた看護婦は、肉感的な美尻をうねらせて、女陰の盛り上がりで男性器をこすりまわした。
「あっ……うっ……あうっ……」
口を割るまいとして彰はこらえるが、下着に浮き出た女陰門をすりつけられて、歓喜の呻きをもらしてしまう。

牡欲に駆られて彰自身が腰を突き上げると、百合はすかさず尻肉を浮かせた。
百合の思うがままに男性器をこすられ、じっくりとじらし抜かれる。
「どう？　昨晩のことを話す気になった？」
何度もお預けをされ、とうとう彰は我慢しきれなくなってしまう。
「じ、実は、昨日の夜……」
浴室での戯れを、問われるがままに白状してしまった。
「そうだったの……。蘭とそんなことをしていたのね……」
百合の口調は、拍子抜けするほどに静かである。
だが、眼鏡の奥にある瞳は嗜虐にぬめっていた。
「看護婦に淫らなことをするような患者には、荒療治が必要ね」
「あ、荒療治……ですか……？」
恐れと、そしてわずかの期待感に、彰の鼓動は速くなっている。
「そうよ。彰くんが、いけないことをできないようにしてあげる」
荒療治の内容を予告するかのように、百合は股間をうねりまわした。下着の股布に浮き出た船底型で、亀頭の縫い目をこすり上げる。
（はぁ……あっ……あう……。何だか……嬉しい予感が……）
百合は、自らの股間に手をやって、そこに張りついている股布を脇へずらした。

あらわれたのは、一本の産毛すら生えていない女陰花。幼女のような無毛でありながら、大人の女性にふさわしく花弁をはみ出させている。

しかも、そこは蜜汁に濡れまみれていた。彰の男性器をじらしているうちに、百合自身も発情していたのだ。

「彰くんのおちんぽに溜まっている欲望……私のあそこで吸い出してあげるわ」

百合は右手で男性器をつかみ、濡れ咲いた女陰花を亀頭にあてがう。牡欲を溜め込んで肥大した亀頭を、女肉穴でくわえ込んでゆく。

ぬぷ……にゅる……ずぶぷぷぷ……。

肉感美あふれる尻が少しずつ沈み、強ばりきった男性器を徐々に飲み込んでいった。

「んぁっ……あっ……ああん……」

白衣をまとった眼鏡美女は、腰を沈めるたびに歓喜の喘ぎをもらしている。

たくましい肉柱を根本までくわえ込んだ瞬間……。

ぬぶんっ……。

「んあああぁ……」

官能的な白衣女体がのけ反った。

荒い息づかいとともに、百合は男性患者を見下ろす。

「風邪なのに、こんなに硬くなっているなんて……」

熱く濡れそぼった女肉穴は、嬉しそうな収縮で男性器をむしゃぶり吸っていた。
「これは、本格的な看護が必要ね……」
眼鏡をかけた美人看護婦は、ゆっくりと腰をつかい始める。
（ああぁ……あっ……あうっ……。百合姉さんのあそこ……気持ちいい……）
あおむけの彰は快楽に身をまかせていた。百合の女肉穴で喰い締められ、男性器は喜びにのたうっている。
「んっ……んぅぅ……あひっ……あん……」
声をこらえようとしている百合だが、尻肉を弾ませるごとに喘ぎがこぼれていた。
「ああぁ……あん……。看護……しているのは私なのに……んあっ……」
たくましい肉柱にえぐり上げられ、百合の女体には官能が響き渡っている。男性器を治療しているというよりも、肉柱で責められているかのようだ。
「ひっ、あぁっ、あひ……。彰くんのおちんぽ……すごいわ……」
昨日の朝、蘭に横槍を入れられて以来、百合の女肉穴は欲求不満に悶々としていた。
そのため、看護どころではないほどの快楽を味わわされている。
「ほ、本当に……看護婦啼かせのおちんぽね……」
どうにかして看護婦としての冷静な表情を保とうとしている百合だが、少しでも油断すると陶酔の顔つきになってしまう。

「彰くんのものを看護していると……私まで……あっ……ああん……」
眼鏡に飾られた美貌は官能に上気しており、白い肌にはうっすらと汗がにじんでいた。半開きになった唇からは、熱い息がもれている。
「私の看護……どうかしら？　痛かったら、すぐに言ってね……」
官能に悶えていることを気取られまいとしてか、百合は看護婦らしい言葉を患者にかけた。
「痛いどころか……すごく気持ちいいです……」
百合と同じく、彰も官能に悶えている。女陰門をすりつけてのじらし責めで、彰の男性器も欲求不満に狂っていたからだ。
美人看護婦の女唇に吸いむしゃぶられて、男の象徴は喜びに脈打っている。
「もっともっと気持ちよくしてあげるわ……」
牡欲に悶えている彰を見下ろして、百合の嗜虐心が再び蘇ったようだ。
腰の上げ下げを少しずつ速めてゆく。
（あぁ、あっ、あううっ……。ちんぽが……しごき上げられてる……）
貪欲に喰い締める肉穴で吸いしごかれ、彰は快楽に灼かれていた。騎乗姿勢での『看護』に、喜び悶えている。熱く潤んだ秘粘膜で吸飲され、裾広がりの亀頭はびくびくと引きつっていた。

「あぁぁ……彰くんの……もの……とってもぉ……ああん……」
黒髪を跳ねさせながら、百合は女体を上げ下げしている。無毛の女陰門で肉柱をむしゃぶり、蜜汁を滴らせながら吸引している。
そこに咲く女花弁はめくれ返り、陰核は包皮から剥け出るほどにふくらんでいた。
眼鏡をかけた顔は、何とかして知的看護婦の体面を保っている。
しかし、股間に息づく女陰は淫蕩な牝そのものであった。
ぢゅぷ……ぢゅぷぷ……にちゅっ……ちゅぶぶっ……。
たくましい肉柱をくわえ込むたび、ふしだらな濡れ音が奏でられる。
「ひっ、あひっ、あっ、ああん……。おちんぽ……おちんぽが……気持ちいいの……」
白衣の内にある熟れ女体は、すっかり発情しきっていた。牝の欲望が渦巻き、男性器で突き上げられるたびに歓喜の音色が鳴り響いているのだ。
「胸が……窮屈で……看護に差し障りがあるわね……」
牝欲に我を忘れた百合は、半ば無意識のうちに胸元へ手をやり、ファスナーを下ろした。
窮屈なところに閉じこめられていた豊乳は、解き放たれたことを喜んで、ふるるんとこぼれ出る。
さらに百合は、ハーフカップのブラジャーを剥き下ろした。豊穣の女神を思わせる乳房が、彰の前にさらけ出される。

（すごい……。乳首があんなに勃っている……）

紅色の乳首は、愛撫をねだるかのように尖り立っていた。はち切れんばかりに勃起した乳首からは、今にも乳汁が噴き出しそうだ。

「これで……看護がしやすくなったわ……」

こぼれ出た乳房を百合は自らの左手ですくい上げ、勃起乳首を摘みしごいていた。

腰を上げ下げするたびに、右の乳房がゆさゆさと弾んでいる。

「あぁ……あひっ……あっ……あん……。あそこが……たまらないの……」

乳首をしごきながらの騎乗はますます激しくなってゆく。あおむけになった彰を組み敷き、憑かれたように腰をつかっているのだ。

その様は、年下の男の子を陵辱しているようにすら思えた。

「あうぅ……あぁ……百合姉さん……」

女盛りの眼鏡看護婦に犯され、彰はただただ呻くばかりだ。憧れの年上女性に騎乗姦淫されているのかと思うと、倒錯の興奮が湧き上がってくる。

「もう……もう出ちゃいそうです……」

「たっぷりと出しなさい」

知的な美貌を官能に紅潮させつつ、百合は蠱惑的な眼差しで彰を見下ろしている。

「彰くんのおちんぽに溜まった欲望を、一滴残らず吸い出してあげるわ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/